桑港より（三月廿一日夜）

二十四日の船にてロンドンにゆき、独・仏などの漫遊を絶へて印度に再遊し、本年中に帰朝の筸に傍らさせるただに私に於いて足をふみのぼし、知覚のせたピケットは今にもチャプ臺から落ちられるように候。書以外に皆無き惡いやうに候。（中略）

学校に於いてて登場なるとは、特に候、ノマダ坊主の仲間に入り、何だかキマリが悪いやうに候。

亞米利加より再び
（三月廿二日午後）
このみで、戦国の野をゆくものの、此の世にたれ、大故国と反目した時とし、此の為せは一生の愛、山の如くつまれること、真箇の仁義を解することの国には多からずと存候。私は無形の銅像、無形の果のなるものなりと深く祈願をて、

戦五 第巻 六 第もど子と人婦

の酸苦にたれたる国人はありて、戦国の吾等ははもってやりたき想有之候、ここのマダムなどは、主人の事業を受負、手にやるは惜しいと、女たちに後継して富をつくり居り候。それ故に前の候、島国とても今十年後に是自然にこよいこと、孟子や孔子のやな、さけびは必用に御座候、例の頑固なる流義御一笑破下度候、金座候、例の頑固なる流義御一笑破下度候、論語、加洲に在留する野蛮人が索市へ贈る、門公園、

下の芝生は私之のいつも詩集を携へて駕車し、處に候が、獨逸人のみやびたる誇りにて敬服し、如何なるものに候、在米日本人には銅像たるは夢のあとをのこすばかりなるが、大乗仏教の、

下の芝生は私之のいつも詩集を携へて駕車し、處に候が、獨逸人のみやびたる誇りにて敬服し、如何なるものに候、在米日本人には銅像たるは夢のあとをのこすばかりなるが、大乗仏教の、

無形の銅像、無形の果のなるものなりと深く祈願をて、
このてがみの由、本名は姉か兄かの筆に候、せつ
れをこに人々の面面白く候はすや、かいな種類の
のわからぬところ面白く候はすや、かといふ種類の
も晴着のぼけっとにッぱいいつめ置候、天涯落
魂の身、どこで死んでもこれを等ははなしがたきも
梅の御返しにもと、唯々ガーデンをぞらせる
手前味噌を書きはじめ御笑ひの程も恥しく候、
大手な花レリを書きはじめ御笑ひの程も恥しく候、
これはさしわげ申候かしく
先月十七日の夕、この書面に接し、さらば又返
に候、この頃右二人から別のものらり候ま、
は彼の地の震災の惨状を報じ越し候。惨害に聴
はまれ人、何れ誰れ彼れのけちめのあるべくもあ
らざるべけれど、わけても、放の道の為め、さ
て慣れ仕事に身を委し居らん、彼の人のが否
のみ健なら身を以て、他国の人家の家に寄寓し
の程もけに如何あらん心もとなく思はれて